
勇者はじめました

くろぱんだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者はじめました

【Nコード】

N3370B

【作者名】

くろぱんだ

【あらすじ】

暴力と世界平和？を愛する女勇者レニー、彼女の旅の仲間（下僕）マカロとの終わることのない旅のお話。マカロは、いつの日か彼女の暴力から解放される日が来るのか？頑張れマカロ！！！！

設定の説明（前書き）

何となく手を出しちゃったジャンル。他の先生方の凄い作品を見て失敗したなあー、って思ったけど あえて投稿！！自己満足の世界です。

設定の説明

はじめに

初めまして♪主役張ってるレニーです♪私についての詳細は秘密♪
レディですから（笑）

一緒に旅している仲間（下僕）の少年マカロ

「はいどうもです」

「呼んでねーよ」

ドカツ！！！！

何故か？マカロの上に狸の置物が マカロ沈黙。しばし夢の世界
に逃避行？

まあ これで邪魔者もいなくなっただんで♪話しの続き。

この世界にはモンスターって呼ばれる者がわんさか溢れているの。
当然、人々はやらねばなشتても癪だし力を合わせて戦ってる
の。そこで出来た施設の紹介。

1・職業所。通称虎ノ門

ここには、ありとあらゆる職業がある。それこそ勇者から村人Aまで幅広く。現在で言うところの、ハロー◯◯クみたいな感じかな」

2・斡旋所。ここは各地で起こった様々な被害を請け負う所。ここから各地の旅人に仕事を依頼する。依頼料は基本的には斡旋所に届けた人から 大体は国、街、村などから出るわ。虎ノ門の子会社会的存在。

この世界での経験地、レベル概念。

ゲームみたいに画面に出るわけじゃないよ。当然、体力とかもね」

ではどうやって？それにはまず虎ノ門で職業選択。決定後にICカードが渡されるの」そこに今のレベル、経験、体力、職種、座右の銘が記載されてるわ、私も勿論いったわよ。詳細はまた後日」

この世界の魔法について

魔法は6属性、火、水、風、土、光、闇。からなってるの」これに関して、精霊と契約しなければいけないの」

うちの下僕は火の属性よ。ただ、人によって素質が違うの。

火の属性で例えるなら 全く素質がなければ暖かい程度かな？逆にめっちゃうちゃ素質が在れば鉄をも溶かす。

ここに経験が加わる。だから暖かい＋経験でも”熱い鍋の蓋”もしくはそれ以上にもなるのよ。

発動に関しては精霊を呼び出す契約を唱え。好きな言葉を叫ぶこれだけ。

以上で、この物語の設定は終わり。長々と付き合ってくれてアリガトウ！！！！またね♪

第1話・序章

村から離れたとある場所

周辺には何もなく、野球なんか伸び伸びと出来そうな所。風も吹いてて心地よい。いい場所ね♪ただ一つのことを除いて

そこには、見渡す限り骸骨の群れ・群れ・群れ
手には各人ボロボロになつた武器を装備♪

「うわぁ〜うざっ」

どこから湧いて来るのか、コイツら 葬儀屋のオツチャン、ちゃんと燃やしてよー！！！！

こんな時、剣で相手にするのも面倒だ。そう こんな時には、やっぱりこの人！！！！パチパチ

「先生♪出番ですよ」

「またあ〜」

あからさまに嫌な顔をする少年。

「頼んだよー」　　と言いながら私は少年の後に隠れる

「面倒はいつも僕なんだよな　ブーブー」

なにやらブツブツ言っているが、全くもって無視。

観念したのか呪文の詠唱を始める少年

その間にも、じりじりと迫り来る骸骨の皆さん方。うーん、ホント
うざっ！！！！

そして少年の呪文が完成した。

「真夏の鍋焼きー！！」

オイオイ、相変わらず分けわかんねー、ネーミング

少年が発した謎の言葉が引き金になり、私達の目の前は物凄い炎で包まれた。

魔力の炎の後には骸骨さん達の燃えカスだけ♪

「ふう　火葬完了♪」

「　　殺ったのは僕じゃん」

後でボソツと呟く少年、あえて無視

「ほらっ置いてくよ」

私は少年を置いて、スタスタと村に向かって歩き出した。

「　　ちょっと待ってよー」

少年は私の後を追いかけてきた。

名も無き村、村長宅

「おおーあの化け物達を退治してくれたのか」

「まあー、たいしたことないツスよー」

「さすがじゃのー」

私もヨイシヨされて悪い気はしない。

「全部 僕が」

ドカツ

「
」

何やらボソツと呟きかけた少年の頭の上には私が投げた鈍器が直撃
少年、そのまま沈黙

「あ あの お連れさんが 倒れて ますよ」

村長は、冷や汗たらたらで私に話しかけた。

「アハハハ 彼の趣味ですよ。鈍器で頭をぶつけるのが」

「そんなもんですか まあとにかく助かりました。謝礼の方は既に斡旋所に伝えてあります」

村長は私の無言のプレッシャーに耐えきれず。それ以上は追求しなかった。

「それでは、ご機嫌よう」

私は不意に沈黙している少年の首根っこをガシッ！！と掴み引きずりながら村を出た。

「 彼が一番不幸だな」

私達の姿を複雑な表情で見送りながら、村長は一人呟いた。

近くの幹旋所

「お疲れ様です。今回の謝礼です」

お兄さんが笑顔でこちらに袋を差し出した。

「どれどれ」 チツ、こんなもんか」

中身を確認すると、100ルニ これじゃーメシー食分（私のみ）
ね。

私の落胆した姿を見てお兄さんがすかさずフォロー。

「しょうがないんですよ。あそこの村は特に特産品もなく貧しいの
で」

「まあ、いいわ。それじゃ」

私は幹旋所を後にした もちろん荷物？を引きずりながら。

ズルズル　ズルズル

ズルズル

あゝいい加減重い！！！！

ゴスッ！！

「
？」

私はいいい加減ウンザリして少年の脇腹を踏みつけた。その衝撃で少年は意識が戻った。

「
あれ？レニー、おはよう！！！！」

「
おはよう！！！！　　じゃないわよ」

どうやら少年は、先程の事故によって？記憶が飛んでいるらしい。

「ほらっ置いてくよ」

「待つてよ」

少年は慌て私の後についてきた。

第2話・いつもの日々

「アレね、今回の相手は」

少し先の方に数人の人影が見える。

「先手必勝♪」

ポイツ

とりあえず近くにある拳大の石を相手に投げつけた。

ゴスッ

期待を裏切らない音をたて一つの影が地に沈んだ。

「ウガーー」

仲間が殺られて他の者がこちらの方を見た。

「ゴブリンだ」

少年はその異形の者達を見て叫んだ。少年の声に気付き一斉にこちらに向かってきた。

迫り来る野良ゴブリン達。その内の一体を私の剣でなぎ倒す。ゴブリンは呻きながら倒れて動かなくなった。

んっ 野良ゴブリン？そもそもゴブリンに野良とか飼いゴブリンとかいるのだろうか。

レニーの想像

とある家の中庭。

「ほらっ！！ボブ 餌の死肉だよ」

「ウガー」

ゴブリンが小屋から出て来る。

「アハハハ ボブ！！！！駄目じゃないか僕の手まで食べちゃ」

「ウガー」

ボブは飼い主まで美味しく頂いた。

「うーんやっぱり餌は生き餌か」

「何、言ってるんだよ。それより早く手伝ってよ」

少年は四体のゴブリンを相手に苦戦している。

元来、魔道士と言うのは非力と相場が決まっている。

何故なら相手に近付かなくても遠くから魔法で一撃、だからだ。この少年マカロもその一人。ワケわからん呪文名を考えるだけにしか脳が活動してない。多分脳の大半は壊死してる。

「ほいつ」

「えっ」

ゴスッ

私が投げた鉄アレイが^{マカロ}見事標的に命中♪マカロは白眼を剥いてあつちの世界に旅立っちゃった♪

「下僕の方で私に指図するな」

カジ カジ

そのマカロをゴブリンさん達がかじっている。

その光景をまるで、愛らしい子猫を眺めているようなキラキラした目で暫く観ていた。

「、そろそろ、助けてやるか」

私は、食事中？のゴブリンさん達に向かって走り出した。

「ウガ」

私の行動に気付いたのか、はたまた獲物が腐りかけで不味いのか（笑）何匹かこちらに向かって来た。

「ウガー」

目の前に迫って来たゴブリンの攻撃を半歩身を引き避けて、走り抜け際に腹を一薙ぎ。

その間に来た二匹目は大きくジャンプして頭から真つ二つ♪

「ウガ ウガ」

残りの二匹は、私の実力に気付いたのか顔を見合わせ逃げ出した。

「フッフ 逃がさないわよ」

私は、懷から予備の鉄アレイを二つ取り出してゴブリンさんに投げつけた。

ゴスッ

ゴスッ

鈍器が頭部にめり込んで残りのゴブリンさん達も全滅♪

えっ　なんで鉄アレイなんか持ってるかって？今時の乙女の必需品でしょ♪

「　後はアイツか」

ガスッ

「げほっ　アレ」

私のヤクザキックが見事にマカロのボディを捉えてマカロは飛び起きた。

最近コイツの起こし方が上手くなってきた。

「さあ　後は報酬よ♪」

私は張り切って歩き出した。マカロも腹を押さえながらついてきた。

「おっ結構入ってる♪」

報酬の入った袋を開けるとなんと3000ルニ入ってた♪

「今夜はゆっくり休もうーとっ♪、アンタは野宿ね」

「何で？」

「今回、役に立ってないし」

「」

「それでも来るなら、顔の原型が無くなる程度にボコるけどどうする？」

私は懷から鉄アレイをちらつかせた。

「外で寝ます」

半泣きになりながらマカロは何処かのスーパーに段ボールをもらい

に
い
っ
た。

第3話・洋館の恐怖

険しい崖の上にそびえ建つ洋館。

「何か不気味だね」

少年は、私の袖をつかみながら小声で話す。

「邪魔！」

私は、少年の手を振り払い洋館の入り口に向かってすたすた歩き出した。

そもそも何でこんな所に建てる必要性があるのか？

持ち主が人付き合いが嫌でこんな所に建てたのか、はたまた絶壁マニアか？

どっちでもいいけど

今回私達がこんな所に居るのには理由がある。

数時間前

近くの宿

「へーそうなんですか」

「でも、なかなか素人には見つけれないわよ」

宿の女将さんと私の会話。なんでもこの近くの山ではあの【なじ茸】が採れるらしい♪

なじ茸ってのは、世界五大珍味で有名なあれである。焼いてもよし、煮てもよし、どんなに下手くそな料理人でも美味しく作れる魔法のような食材。

それだけじゃなく、このなじ茸は非常に高級品。これ一本で私の愛用の鉄アレイが数ダース単位で買える。

「女将さんありがとね♪」

「あんまり無理しちゃ駄目よ」

女将さんは私達の姿を心配そうに見送った。

「見つからん」

さっきから山の中を徘徊しているが、なじ茸のなの字も見つからない。

「ちょっとレニー疲れたよ それに これって普通は動物とか使
ってやるんじゃないかな」

「いいじゃん、アンタも似た様なもんだし」

「。。。」

少年は首に紐を付けられよつんばになっている。

なじ茸は香りが強い。よく嗅覚が鋭い動物を使って採取するって聞いたことがある。

早速、実戦♪実戦♪

先程の少年マカロ（下僕）を使って捜してたというわけだ。けど

全くもって見つからない。辺りも暗くなってきたので、泣く泣く諦める事にしたのだが

「　　えーと」

「　どうしたの？」

「　ま　迷っちゃった、テヘ♪」

「　えーーーーー!!」

そんな感じで何とかこの洋館を見つけたってわけ。

「　ほら、早く」

私はマカロに向かって叫んだ。

　　トラブルのもとはいつもレニーなんだよな

少年はボソツと私に聞こえないように呟きこちらに向かって来た

まあ私の地獄イヤーには確実に聞こえたけど

マカロ鉄アレイ+1

私は忘れないようにメモに書き記した。

私達は洋館の中へと入っていった。

洋館の恐怖2（前書き）

今回は全くもってネタが思い浮かばなかったorz 苦し紛れの内容です。

洋館の恐怖2

洋館の中は当然真っ暗。なにも見えない。

「マカロ、明かり！」

「ちょっと待って」

マカロは呪文の詠唱を始めた。

「生焼けサーモン」

どういつ効果あるんだよ。腹が痛くなるのか？

私はツツコミを入れたかったが何とか胸の内に留めた。

マカロの目の前に魔力の炎が出現した。

炎の明かりに照らされ周りが見えるようになった。今いる所は広いロビーになっている。洋館の内部は期待を裏切らない程度に寂れていた。

誰も住んでなさそうだしそんなもんね。この調子だとフカフカのベッドもお預け。雨風凌げるだけマシか。

せっかく来たんだしあら捜し♪

私達は更に奥へと進んでいった。

そこは両脇に甲冑を着こんだ西洋の兵士の像が並んでいる。

「ねえ レニー 動いたり しないよね」

「大丈夫よ、マカロ。実際動いたら片っ端から潰せばいいだけじゃない♪」

「そという問題かな」

マカロはあまり納得して無いみたいだけど 気にしない♪

「マカロぐすぐずしてると置いていくよ」

私は歩き出した。

ずるずる　　ずるずる

「　　ねえレニー　何、引きずってるの」

「何ってコレの事？」

私は掴んでいる物に目を向けた。それは、さっきまでそこに並んでいた兵士の像が一体。

「拾得物♪」

「拾得物♪　　じゃないよ！どつするのンレ」

「えゝどつするって」

- 1　・マカロを笑いながらどつく
- 2　・マカロを無表情でどつく
- 3　・マカロをどつきながらどつく

「どれがいい」

「　　やめて下さい」

「チッ」

マカロが泣きながら哀願してきたんでしょうがなく投げ捨てた。

それにしても長い廊下ね。普通ならいくつも部屋がありそうなのに
両側は壁、壁、壁。

いい加減ウンザリして壁を破壊しようかと本気で考え始めた頃、
ようやく一つの部屋の前にたどり着く。中には誰か居るらしく部屋か
ら声がする。

「ねえ 誰か居るよ」

マカロが小声で私に囁く。

「大丈夫、大丈夫、盗賊の類이었다たらシバキ倒せばいいから」

「ちーす、お邪魔しまーす」

私はマカロの制止を振り切って扉を開けた。

。

がすぐ閉めた。

さっきの兵士、持ってきとけばよかった。私は今更ながら後悔した。

後でマカロが私の事を不思議そうに見ている。

「さっ帰ろっか」

私が何か言いたげな、マカロを問答無用で鷲掴みにしたその時、予想通り扉が開いた。

間に合わなかったか。

洋館の恐怖2（後書き）

レニーは何を見たのか！扉の向こうには一体誰が？　まだモヤモヤとした設定しか考えていませんが次号も宜しくお願いします。

洋館の恐怖3

「ようこそ」

そこには一人の男が立っていた　パンツ一枚で。

「まあ　中に入って」

。

仕方無く私達二人は部屋の中へと足を踏み入れた。そこにはレニーがさつき見た光景が広がっていた。

部屋の中では男達が何やら楽しそうに話している。パンツ姿でしかも全員ビキニ。テーブルの上に置いてあるランプの明かりだけが男達を艶やかに照らしている。

その異様な光景にすでにマカロは石化。私は意識を辛うじて保って懐の鉄アレイに手をかけた。

「ちょ　ちよつと待て」

私のどす黒い殺気を感じ取ったのか一人のリーダーらしき男が前に出てきた。

「まずは我が“裸体友の会”にようこそ！私は会長のモミヤマだ」

「裸体友の会？」

「左様、お互いの体を他人の家で密かに誉めちぎり合つと言つ、次世代友の会だ」

いや そんなゲーム機っぽく言われてもね それに他人の家でやるなよ、自分の家でやれ！ツツコミ処満載だ。だが私が必死に堪えているのにも関わらずモミヤマは話しを続けた。

「所でお前達、入会希望者か？ にしてはちよつと貧相な体だなハハ」

「プチッ」

「まあいいや！今なら格安で2000ルニから受付けるぞ」

モミヤマは最高の笑顔でこちらに手を差し出した。

「言いたいことはそれだけかな」

「えっ？」

「ウッフ 気持ち悪い姿見せられて更に金まで要求しあまつさえ貧相な体だ、暴力女、鉄アレイマニアだと 極刑決定」

「　　そこまでいってないぞ」

慌てるモミヤマしかし時、既に遅し　私の中の小人さんは暴走モミドのボタンを迷わず押した。そして私の理性は吹っ飛んだ。

「ウフフフ　死にたいの」

「うわああー」

「アハハハ血に染まれ」

「ヒイイイイ」

「ウフフ　アハハハハハ」

「　　○　　」

逃げ惑う裸体の会のメンバー。それを追いかけてボコボコにする私。ついでにマカロも、辺りは一瞬にして地獄と化す。

「あらっ？」

私は、ふと我に返り周囲を見回す。友の会のメンバーは全員無惨な姿になり動かなくなっていた。マカロも部屋の隅で完全に延びている。その場に立っているのは私だけ。

さてとまずは

ドカツ

「げふっ」

モミヤマをヤクザキックで優しく蘇生。

「ひひひひー」

モミヤマは私を見て恐怖で震えている。

「でどうする？」

「ひひひひーすいませんでした」

そしてモミヤマ+友の会のメンバーは慌て洋館から逃げ出した。

後には延びているマカロと私だけ。

「？」

テーブルの上には分厚い封筒。

ラッキー早速、中身を拝見♪

「ひい ふう みい おお♪」

中には10000ル二入っていた。

よし、これでなじ茸の件はチャラ♪私は直ぐに懐に入れ安心してそのまま眠りについた。

第4話・そして始まりへ―魔王編

ある街のとある裏路地ここは知る人ぞ知る裏商店街の一軒のお店。

「いらっしやい おお レニーさん毎度」

「どうも」

ここは私の行きつけのお店」鈍器の専門店“ナカムラ屋”である。
今日はマカロと別行動。

ナカムラ屋は全世界にひっそりとチェーン店を持ち、その個性的な品揃えに芸能人のファンも少なくない。そして何より最高なのがこのオーナーの名前がコジマさん。店名全くもって関係なし。ナイ
ス」

「ねえ 何かいいの入ってる」

「丁度いい時に来たね、ほらっ」

コジマさんが奥からなにやら持ってきた。

「おおー、こ・り・は」ジョン＝プリピッティが、だんじり男祭りの時に使ってた、幻の鉄アレイ【木漏れ日MAX】」

「さすが通だね」

「でいくら」

「ジマさんは私の前に両手を出した。」

「10000ルニやっぱちょっと高いね」

「違う、違う100000ルニ」

「げっ、100000ルニっ!」

「限定モデルだからね」

「ワァーン!○○えもん」

私は泣く泣く店を立ち去った。

「で結局何がしたいの?」

ここは、街の小さな食堂。マカロはサラダを食べながら言った。ちなみにマカロはベジタリアンだ。

「ちょっとだけ、お金を貸して欲しいの。」

「いくら?」

「たったの100000ルニよ。」

「ぶつ、100000ルニイー!」

マカロはサラダを勢いよく吹き出した。汚ねー。

「そ そんな大金あるわけ無いじゃん」

「大丈夫よ。アンタの内臓パッパって売っちゃって、ついでにアンタもパッパって売り払えばね。」

「ね ♪ じゃないよ」

「じゃあさ、アンタの実家売り払っちゃって、ついでにアンタの内臓もパッパってね。」

「ねえ レニーどうしても僕の内臓売りたいわけ?」

「アハハハ 冗談よ。」

「ちょっと本気だったりして。」

さてさて困った。どうしたものか。この間にもあの商品が売れちゃうかも知れない。一応コジマさんには

「いくら私と貴方の仲でもソレ誰かに売っちゃったりしたら三回は確実に地獄見せるわよ」

って優しくお願いしたから大丈夫だと思うけど。

「そう言えばさっきお城の方から人が来てたよ 何でも賞金が」

「賞金」

「そうそう、その賞金が あ ちよつと待ってよレニー！」

私はマカロの言葉を最後まで聞かずお城に向かってダッシュした。

賞金♪賞金♪賞金♪私のお金♪鉄アレイ♪

もう私の中では賞金を手にした私しか見えない。賞金ちゃん待ってね♪

お城の前は、たくさんの人で賑わっていた。

「失礼」

ドカツ

「うげっ」

ゴスッ

「ぐはっ」

メリッ

「」

邪魔な野次馬を次々と潰していくと目の前に立て札が立っていた。

『つどえ強者！明日の朝、腕自慢大会を開催する。腕に覚えのあるものはどしどし参加するべし。尚、ルールの詳細については大会当日に発表する。』

モンチ』

モンチって誰だっくん気になる。

辺りには私が倒した者達の呻き声だけがいつまでもいつまでも聞こえていた。

そして始まりへ2 魔王編

そして翌日

「ねえ やめようよレニー」

「何いつてんの！賞金が欲しくないの？」

「賞金たってレニーが貰うんでしょ」

「当然！もしやめるならマカロ、貴方の内臓はパツパと」

「すいませんでした。やめて下さい」

「分ければよろしい」

私達は受付会場へと足を運んだ。

受付会場には沢山の人が並んでいる。戦士や魔法使い、村人A等ポピュラーな人達からピザ屋の配達途中のお兄さん、ニートまで幅広く集まっている。 てお兄さん配達大丈夫？

「ハイハイじゃ注意事項よく読んでサインしてね」

パーマのきつついおばちゃんを加えタバコで私達に一枚の紙を差し

出した。

「うーんどれどれ」

注意事項兼誓約書

1・この大会における怪我、死亡等に置ける事故は委員会としては一切責任を負いません。

「ほう あんまり穏やかじゃないね」

2・基本的にはルール無用ですが、ガン〇ム、ザ〇等のMSの使用は禁止します。

「そんなの使われたらほぼ勝てないし」

3・この大会ではタッグを組むことを了承する。ただし どちらか一人のみリングに上がる事。

4・タッグを組んだ場合。どちらか一人が負けた時点で失格とする。

5・会場に食べ物等の持ち込みは了承する。ただし300ルニ以内

とする。

「一昔前の小学生のオヤツ代か！」

6・当委員会の会長兼審判のモンチとしては、ポッ○のCMに出ている女の子は最高だ！。

「ほう モンチって奴は審判か ってポツキ○関係無いじゃん」

7・アハハハ！ぶっちゃけここだけの話し。昨日、鉄アレイ女 けふっ

「何 私の事？誓約書 関係無いし、けふっ って」

8・当サイトは初回のみ無料ポイントとして150Pが会員に与えられる。

「 出会い系じゃん」

9・そろそろ読者も飽きて来る頃なんで以上の項目を全て了承した者は下記へサインをする事によって規約を終了するものとする。

「ほんじゃ後はカキカキと、ふう ツツコミどころが満載だった」

これで残すは本選のみ。ウフフフ 賞金ちゃん待っててね♪

私は、鉄アレイに磨きをかけた。私の変なハイテンションとは裏腹にこちらを冷やかな目で見ているマカロがいた。そんな目で見てられるのも今のうちよフフフ。

大会会場

「レディース〜エン〜ジェントルビッチ！」

ジェントルビッチって げっ、しかもさっきの受付のおばちゃん。

そう、今ステージに立っている司会者こそ、会長 兼審判 兼司会のモンチだった。余程人材不足か？

「皆様大変お待たせしました って、そのじいちゃん大丈夫？片足棺桶に突っ込んでるよ♪グツジョブ！」

「ふおおー！」

じいちゃんよく分からず手をぶるぶる振っている。

。

「ルールは簡単MS使用禁止以外は特になし、負けを認めるなら一言せーの、ハイ？」

「ボサノビッチー」

観客から一斉にコール

何この大会恒例行事な分け？

そして問答無用の戦いが幕を開けた。

第5話・新しき仲間〜魔王編

一回戦

美女っ娘レニーと下僕達VSアフロ〓礼

「おっし！私が考えただけあってナイスなチーム名。じゃマカロ頑張つてね♪」

私はマカロの背中をドーン。

「え えー！」

マカロの非難の声。

「あつ 言つとくけど負けたり、逃げたりしたらアンタの内臓パツパだからね♪」

「ひいひいー」

マカロは覚悟を決めたのか、あるいは逃げられない事を悟ったのか必死の形相になっている。

一回戦位ならマカロで充分♪私はポテチを取り出し、のんびり眺めていた。

「
」
「
」
「
」
「
」
「
来ないな」

皆、対戦者が現れず退屈し始めた。その時

「アフロ行きまーす！」

ズン
ズン
ズン

物凄い地響き。そして一体の巨大な白い悪魔が現れた。けどアレ
って？

「ぶーっ！はい、アフロさん失格」

「何故だい 僕が」

イヤ 禁止項目めっちゃ破ってるし ひょっとして馬鹿？それに
あんまりそのネタやると抗議が来そうなんで速やかに消えてね♪

「 と言うことで、美女っ娘レニーと下僕達チーム、アフロ野郎の不正により勝利！」

「ブーーーー！ブーーーー！」

客席からブーイングの荒らし。そりゃそうだね。

マカロに観客の投げた物が飛来してくる。うわーっ、マカロ災難♪

その時、マカロに一つの食べかけのサバの缶詰が降り注いだ。

げっマズイ 。

私は慌て出来るだけ遠くに避難した。

それと同時に、マカロの中の小人は暴走モードのボタンを押した。

「 ウフフフみんな死んじゃえ！」

「 真昼の大火災、鰻パイの誘惑」

マカロの一言で会場一帯は地獄の業火に包まれた。

実はコイツは大のサバアレルギー。しかも、質が悪いことにサバに触れると、自我を失い最大級の呪文を無差別にぶつけて来る。

が幸い会場に対火炎系の防御魔法が使える人が数人、居たみたいで大事には至らなかった。

マカロは全ての力を使い果たしその場に倒れた。

いくら防御呪文で防いだとしても被害は少なくなかった。大会は復旧まで一時停止になった。

その後、特に盛り上がりもなく私達は決勝戦まで駒を進めた。

最終戦

美女っ娘レニーと下僕達VSモミヤマ

「えっ モミヤマ 何処かで聞いた名前だな」

「フフフ 久し振りだな！娘よ」

「あっお前は アノ時の変態会長！」

「そうそう、その変態 って違うわい！」

そう前の会で出てきた（詳しくは第・3話で）裸体友の会、会長のモミヤマだ。

「フフフ お前達に組織を潰されたんでな。資金が乏しくなったんでこの大会に出たのだ！」

「ほうー♪ でっ？」

「くくくつ、決まりきった事を聞くな」

私は構えた。そしてモミヤマは手を上げ。

「ボサノビッチ！」

高らかに宣言した。

「えっ？」

「だって勝てる分け無いじゃん！」

そう言つてモミヤマは泣きながら逃げ出した。うーん結果往来♪

「じゃあ Aブロックの優勝者は美女っ娘レニーと下僕達チーム！」

「やった！賞金ちゃん ってAブロック？」

モンチの勝利宣言と共に奥から鉄製の防具で身を包んだ兵士が数人出てきた。世にいう完全武装ってやつですか。私が身構えていると、一人の兵士が　。

「オメデトウ御座います！さあ　こちらへ」

兵士に導かれるまま私達は歩き出した。

「レニー　何処に連れてかれるのかなあ？」

マカロは不安そうな表情で私を見て言った。程なく私達一行は城の中へと通された。

王の間にて

「まずは長い戦いご苦労じゃったな！よくぞ勝ち抜いた強者共よ！」

今話してる、このオツチャンこそ何を隠そうレイウオース国の王様フェンリー又三世だ。

そして私達の周りには六人　多分、他のブロックで勝ち抜いた優勝達。

「そして少ないがコレが賞金だ受け取ってくれ！」

側近の者が私達全員に袋を手渡した。この重みから察すると1000ルニくらいかな？ ホント少な〜。

「この大会を開いたのには訳があつてな 実はじゃな 魔王の居場所が判つたんじゃ！」

「魔王！」

その場に居た私達全員は驚いた。

はい！ここで、良い子の皆。コンニチワ♪物知り叔父さんだよ！今回は魔王について簡単に説明しよう！

魔王とは モンスター達の親玉。今で言う社長さん。君達のお父さんも会社に行つてヘコヘコしてるんだよ♪社長の気分損ねて

「君、明日から来なくていいよ！」

な〜んて言われちゃつたらお父さん公園でブランコ漕いで けふっ ゴメン、ゴメン。話しが脇に逸れちゃったね♪

コホン 兎に角その魔王と神の闘いと言うのが、実際に在りました魔王は、神によって力を細かく分断されてこの世界に封印された分け♪

でも神も当然無傷じゃない。魔王との闘いで深手を負い現世に留まれる力を失った。まあ 用は死んじやったんさ♪アハハハ。

ただ神も渋とかった。どの位、渋といって？そうワイシャツに付いた口紅位かな？お父さんドッキリ♪

特定の人々に神の力を分け与えた。魔王を滅ぼす為にね♪

そして人々は魔王を倒す為に立ち上がった。モンスター達は、魔王を復活させる為に人々を襲っている。何せ魔王を復活させるには人の魂が大量に必要なからね♪これが人々と魔の者の闘いの始まり。分かったかな？ではまたアディオス！

何か 今、変に長ったらしい、ナレーションがあつた感じが
ま
あ
い
い
や
♪

「魔王はこのレイウォース国から北にずっと行った遙か先の山脈地帯の一角ミュヘル山に居る」

「そこでじゃ！ 姫を呼べ！」

側近の兵士が奥へと消えた。程なくして一人の女性を連れて来た。

「わしの娘 リリスじゃ！」

うーん私と同じ年位かな？金髪に髪を肩の辺りで揃えている。肌の色が雪の様に白い。

「姫も神の力を受け継いでいる。お主達を試したのも他にもない封印されている魔王を姫と共に倒して来て欲しいんじゃない！」

一同余りにもスケールの大きい事に声を出せない。

「これは強制ではない 無理な話と言つのは重々承知のうえじゃ！無理な者は帰って良いぞ！」

王の一言で次々と皆立ち去る。いつの間にか残って居るのは私とマカロのみ。マカロは既に逃げ出そうとしているが私がしっかり抑えている♪

「お主達は帰らぬのか？」

「フェンリーヌ王！一つ聞いて宜しいですか？」

「何じゃな？」

「報酬は？」

「お主が望むままじゃ！」

王は苦笑いしながら答えた。でも、こっちも命懸かってんだから貰うもん貰わないとね♪

「分かりました引き受けます！」

「えーレニー何言ってぐはっ」

何故か？マカロは頭に鉢植が直撃して倒れた。って今回私はまだ手を下してないぞ！

あっ！よく見ると王の隣の側近さんが此方に向かって親指を立てている。側近さんナイス♪

「そうか！引き受けてくれるか。後の事は心配するな墓石の方も既に石屋に発注済じゃ」

うん、王様じゃなかったら確実にどついてた♪

こうして私達の長い旅が始まった。鉄アレイちゃん少しの間、待っててね♪

レイウォース城城門前

「まずは自己紹介からね私の名前は、レニー＝フィスト、レニーって呼んでね♪」

今回初めてフルネームだって？気にしない、気にしない♪

「うんで、こっちがマカロ、下僕でもハチ公でもいいよ♪」

マカロが此方を見て文句のありそうな顔をしているが、そこは完全無視♪

「えっ 私はリリス リリでいいわ」

リリスは私の迫力に圧倒されたのか？遠慮がちに答えた。

「まだ魔王を倒すには心細いけど ガンガンLV溜めて、さっさと片付けちゃいましょ♪」

「僕も着いて行くよ 結局逃げられそうにないしね」

「改めてヨロシクね♪レニー、マカロ」

そして私達の新たな旅が始まった。

「所で前々から気になってたんだけど レニーのLVっていくつなの？」

「ん？ちよつと待ってね」

私は懷をこそこそ。ICを取りだした。

「えーと、257」

「レニー一人で充分じゃん！」

マカロとリリスの声がハモった。うーん、いきなり楽勝ムードぽかったりして。

第6話・変態戦隊（前編）（前書き）

久しぶりの執筆です♪

他の作品が完結したんで再開。
…でも次回作は未定。

第6話・変態戦隊（前編）

「暑い！暑い！暑い！暑い——い！」

「レニーちよつと、五月蠅いよ！こつちまで暑くなるよ」

「ほーっ」マカロ君、言ってくれるね！君の身体中の血液無駄に全部搾り取りますか？」

「…すいません」

「分ければよろしい」

私の一言にマカロは素直になった。

「確かに暑いわね」

リリスも額の汗を拭いながら言った。

見渡す限り砂、砂、砂。ここは砂漠のど真ん中。

何でこんな所にいるかという話しは少し前に戻る…。

「…はあ？」

「だから、こうしてお願ひしてるのです！」

老人は私達にひたすら頭を下げながら言った。

ここはレイウオース城から北に向かって最初に訪れる街イリダ。ここから先は広大な砂漠地帯。

旅人は必ずこの街で砂漠越えの準備をする為、この街は活気づいている。

この老人…この街ではそこそこの知れている行商。個人依頼の報酬も一般の相場と比べると格段にいい。

その依頼内容だが…。最近この近辺で盗賊団が旅人や行商、モンスターを見境なしに襲っているらしい。…まあモンスターは別にいいが。

「私達に任せてください！」

「おお…引き受けてくれるのか！」

「…ちょっと、リリ！勝手に…」

「何言ってるの、レニー！困っている民を見過ごせるわけないですよ！」

「うっ…」

流石に王女… 私としてはサクサクつと魔王ぶつ飛ばして、『はい、サヨナラパターンで行こう作戦』の予定でいたが仕方無い。

「…分かった、引き受けるわ！」

こうして私達は盗賊退治に乗り出すことになった。

…こうなったらガッツリ礼金貰ってやる！

私は密かに決意した。

「たぶん、皆僕のこと忘れてるよね」

マカロは一人ふて腐れていた。

街の酒場にて…

早速、情報収集♪

私達は盗賊団の目撃者探しの為に、いったん別れて聞き込みに回った。

…で話をまとめると。

1 ・盗賊は5〜6人ぐらいの集団

2 ・全身特殊スーツみたいなので覆っている

3 ・何か異様にカラフル♪

4 ・砂漠の途中にある
オアシスに出現するらしい

5 ・鶏肉が苦手らしい

…変態コスプレ盗賊団か？しかも何で苦手な食べ物分かる！

私は二人の話しを紙にメモしながら頭を抱えた。

…ツツコミ役が足りん！

「しょうが無い、まずはオアシスに行ってみましょ！近くに彼らの
アジトが在るのかも知らないし」

「そうね！私も賛成だわレニー」

「僕の意見は…聞かないよね？」

「当然！」

私とリリの声がハモった。

嫌な予感がする。ゴタゴタに巻き込まれるのは目に見えているが、三人はオアシスに向かった。

…で結局何の準備もしないまま砂漠に旅立った、おバカさんな私達。本気舐めてましたスンマセン砂漠さん！

もう遅いツスよ！アハハハハ…。

そんな感じで太陽は私達を永遠と照らし続けている。

どれくらい歩いただろうか…目の前に砂漠の風景となんともミスマツチな木々が見えてきた。

砂漠の質量と比べるとちっちゃなその場所には、ちよつとした空き地くらいの広さの水があり周りは木々で生い茂っていた。オアシスだ。

「み…水、水、水、水♪」

「喉がカラカラだよ」

「ふうー、危なかったわね」

私達是我先へとオアシスに走り出した。

「うわぁっ！最高♪」

「アハハハハ！レニー見て見て」

「うふふ…二人とも子供みたいね」

私とマカロは水の中まで入り、リリスはそれをただ眺めていた。

「フフフフ…お前ら！」

「ウツサイ！後にして」

「…はい、すいません」

私達は暫し自然の恵みを堪能した。

「あのー、そろそろいいッスかね」

「はいはい…で何？あんた達…つてげっ」

そこに居た連中は多分私達が探してた盗賊団なのだろうけど…赤、青、黄色…確かに情報通りカラフルやねー、まるで戦隊者。

「ハハハ、悪党共め！我が正義の為にここで金目の物を置いて消えろ」

なんだ…コイツら？

「…あんた達」

「みんな、いつもの行くぞ！」

「おう！」

赤いリーダーらしき人物の呼び掛けで残りのメンバーが陣形を組んだ。

「紅きこと吐血の如し…カラーレッド！」

おい…大丈夫か？

「蒼きこと3ヶ月位放置した食パンの如し…カラーブルー」

100%死ぬね」

「黄色きことウコンの力」

呑んだら飲もう」

「紫、ピンク特になし！」

いばるなー！

「ぐはっ！」

とりあえず私のツツコミ攻撃で二人沈黙♪

「えー…コホン、我ら五人（二人先頭不能）揃って！」

「カラーレンジャー！」

「おーっ！パチパチ」

私達は観客目線で眺めていた。三人のバックに煙幕がカラフルに咲き乱れた。

金のかかった演出…けどそれでなにが言いたいのか？

第7話・変態戦隊（後編）

「まあ見せ場も作ってやった事だし、サクッと殺っちゃおうか」

「そうねー悪は滅びてもらわないと」

「ちょーと待て！」

「何よ！」

私とリリスが身構えるとレッドは慌て手で制した。

「お前達、何かほら聞きたいことあるだろ？」

「別にー」

「無いわ」

「イヤだからさ…あなた達の目的は何に！みたいな感じの」

「別に」

「特に無い」

「ほら…えーとご趣味はみたいな」

「別に」

「無い、無い」

「頼みます聞いてください！」

レッドは泣きながら懇願してきた。

何か面白い奴」

「…しょうがない、マカロ」

「うん、お・前・達・の・目・的・は・何・だ」

すっげー棒読み！

「そんなに聞きたいか？良からう教えてやる」

急に態度を変えたレッド、余程嬉しかったらしい。

ちなみにイエローとブルーは私達のやり取りを横目にアドレス交換している。

…うわぁヤル気ねー！

「我らの目的はただ一つ！他人の金を横取りして楽しく暮らす」

レッドは拳を突き上げ高らかに宣言した。

「えい♪」

「ぐぎゃ〜!」

自分に酔いしれているレッドを背後から私とリリスのダブルキック♪

「リーダー!」

「大丈夫ですか?」

慌て駆け寄るブルーとイエロー。何故か仲良く手を繋いでいる…カ
ツプル誕生か?

「くっ…卑怯な、この悪党共め!」…盗賊団に言われたくない!

「我が正義の鉄槌受けてみよ!いくぞ!」

「スンマセン…リーダー、親が危篤なんで帰ります」

「なに〜!」

「私も自宅の方角から何やら不穏な空気が流れている気がしてきた
んで、じゃあ♪」

ブルーとイエロー戦線離脱。

さっきまで倒れていた、パープルとピンクもいつの間にかいない。
残りはレッドただ一人。ちょい可哀想♪

「ふふふ…これで終わりと思うなよ!」

「まだやるの?」

「やめた方がいいですよ」

「甘いな!まだ奥の手がある」

そう叫ぶとレッドは懐からリモコンを取りだしボタンを押した。

それと同時に地面が割れて中から巨大なロボが出現した。

…でかつ!

そのロボは高さにしてお父さんが頑張って働いてコツコツ貯めたお金を頭金に、三十年ローンを組んだマイホーム四個分くらいの高さはある。

…お父さん定年まで頑張れ」

「ハッハッハ!戦隊物といえばお約束どうだ参ったか!」

…何か物凄く悔しい!

「そろそろ終わりにしようか!ロボ殺っちゃって」

レッドは若干キャラが変わりながらロボに命令した。

ロボの目が怪しく光、ちょうど腹部のあたりから虹色に輝く光線が発射された。

虹色の光線は私達の遙か頭上を通り過ぎた。

その衝撃の余波は私達の所まで届き、立ってられない位の風が吹き抜けていく。

あっ！マカロ飛ばされてるし♪

暫く後、物凄い爆音が辺りに響きわたった。

「あっちの方角って確か…」

「フッフ…そうだなあ街は跡形も無いだろう！」

「ちっ…報酬が！」

「何に言ってるんだよレニー！」

マカロとリリスの非難の声。

「次はお前達の番だ！ロボ殺っちゃって…ってアレ♪」

…ロボ倒れてるし！

実は先程の攻撃の衝撃で、そのまま仰向けに倒れちゃったみたい♪

ロボは暫くもがいていたが遂には動かなくなってしまった。

レッドはというと…既にいない！

うぬぬ…逃げ足だけは速い！

「…どうするのレニー？」

いつの間に復活したんだマカロ！

「レニーさんマズイですわ！」

確かにちよいまずいわね！街は…多分もう崩壊してるし、ロボ倒れるし、肝心の犯人は既に逃亡。

どうするレニー？このままでは牢屋行きは確実。レニー達はこの状況を打破できるのか？…次号『狂喜の看守、脱獄大脱走』にて続く…

…終わらないっの！

そんな次の回のネタなんて無い！

「…ちっ！」

『ちっ！』とか言っなー！

ドカツ！

「…ぐはっ！」

久し振りの鈍器攻撃でナレーション役死亡。

只今ナレーション代行Bでお送りしております♪

「レニー誰と話してるの？」

「気にしないで♪」

マカロが胡散臭そうな顔で此方を見ている。

…とりあえず

「埋めちゃおつか♪コイツ！」

私達は口ボを埋め始めた。

流石に手では無理だったが都合よくマカロが『土砂噴出』という魔法を覚えていたので作業は楽だった。

この魔法、生活系に属する魔法で詠唱一つで多少の魔力があれば誰にでも使える。俗にいう生活密着型というやつ♪

マカロに何故こんな魔法覚えているか聞くと何となくの一点張り…
怪しい！

…まあ後で拷問でもして吐かせようっ♪

ようやく口ボの姿は砂漠の砂で見えなくなり、そこは大きな丘になった。

後は…

「さあ出発！次の街に行くよ。」

「ちょっと…休ませて！」

「待つてレニー！いいのこれで？」

「大丈夫よりリ♪ほらっ置いてくよマカロ！」

私達は次の街に向かって歩き出した。

暫く後一つの噂が世界中に広がった。

砂漠にある街が一夜にして魔王に滅ばされたと…。

噂の震源は私だけだね。」

あれから行く街々でこの話を流している。

とりあえずこれで魔王の仕業ということになった。ひと安心。」

さあこれで心置き無く次の冒険にレッツゴー。」

第8話・一回逝つとく？（前書き）

最近全く書いて無いんで慌て書きました。途中までですが…読んで下さい。

第8話・一回逝つとく？

「うーんレニーお腹減ったよ！」

「レニーさん私もですわ！」

「それは私も同じよ！」

最近、野宿ばつかでちゃんとした食事にありついて無い。

その訳は前回（詳しくは変態戦隊で♪）の事件のせいで近辺の街に居づらいのもあるが一番大きな問題は…お金が無い！

今回の旅、特に臨時収入も無く先を急いでいる為、元々の蓄えも底をついてしまった。

頼みの綱のリリスも…

「へっ？…ルニって何？」

何と！このお嬢さん、お金という物を全くもって知らなかったらしい。

ヨッ、王宮育ち！

沸々と沸き上がる殺意を拳に込めた。今なら魔王も一撃で仕留める事が出来る気がする…しかし王女様は流石に殺れない！

一国を相手に戦え無いからね。

その辺の食べられそうな獲物を見つけても…

「御免…パス！私得体の知れない物は受け付けないわ！」

なぬー！このお嬢。

結局旅の行商を捕まえて食料を買う始末、
これではお金がもつわけが無い。

贅沢言うな！マカロ何ぞ、三日位カエルの蒲焼きだぞ！

…そう言えばマカロ昨日寝言で、

「ゲロ、ゲーロ！」

…って言ってたな、そろそろ危ないかな♪

しょうがない真面目に次の街で仕事探すか！

私は重い足取りで街の方へと歩き出した。

後から私の気も知らないで腹減ったね、何ぞ言いながら二人がついてくる。

…いつの日か必ず殺す！

私はどす黒いオーラを放ちながら心に誓った。

ネルダ街の入り口付近…

「短期で高収入の仕事ですか？」

ここはネルダ街、特に有名な物は何も無い。街の入り口からでも見えるばかりデカイ屋敷があるくらいだ。今私達はこの街にある幹旋所に来ている。

「そうねえー！後は食事付でお土産なんてあつらもつ最高♪」

「レニー…そんな所、多分無いよ」

マカロが呆れた顔で此方を見た。

「何言つてんの？有るかも知れないじゃん♪」

「…無いよ」

「あつ…有りましたよ！お土産は無いですが」

「…えっ？あるの！」

「…ちつ、土産は無しか！」

幹旋所のおじさんが多少顔を引きつらせながら指差した部分を覗き込む…フムまあ依頼料金もまあまあね♪

「いいわ！受けます♪」

机の上に手をドンと置き即答した。

早速、私達は依頼主の元へと向かった…待っててね御馳走ちゃん達、
今行くからね♪

とある屋敷前…

…凄い！

そこは想像していた通り豪華な建物だった。

「御待ちしておりました旦那様が御待ちしております、さあどうぞ」
よくお話で出てきそうな、いかにも執事な感じのオツチャンに案内
されて私達は屋敷の中に入った。

…うわぁ
♪

屋敷の中には値段の高そうな品々がこれでもか！…って位、ところ
狭しと並んでいる。

「…これ売ったら、いくらになるかな？」

「一生、左うちわだね♪」

私とマカロは執事の後についていきながら見慣れない光景に目を奪
われた。リリースだけはさして興味が無さそうに歩いている…まあ一
国の王女なら見慣れてるんだろうね。

私はふと、一つの物に興味を引かれた。それは女性の彫像だった。
…その彫像は両手を掲げて天を仰いでいる。肩まで伸びる髪、女性特有の曲線美。その表情は慈愛に満ちていて、見る者の心を和ませる力がある。

「…気に入りましたかな？」

声に振り向くと一人の恰幅のいい男が立っていた。

どうやら今回の依頼人、この屋敷の主らしい。

「この彫像は『光輝く時』っていう物です」

「素晴らしいですね」

「そうですね」私もこれが気に入って毎日眺めてるんです」

男は自慢気に髭を撫でた。

私は男の方を振り返り、

「…所で依頼の件何ですけど？」

「えっ？」

男はこちらの顔をまじまじと見て。

「…ああ、貴女方ですか？話しは聞いておりますよ。旦那様がお待

ちです。奥の方にどうぞ」

…はっ？

「…あなたじゃないんですか？」

「ハハハ…何を言ってますか？私は見ての通りこの庭師です」

男は悪戯っぽくコチラにウィンクした。

…イヤ庭師に見えん！断じて！

しかも仕事サボって何をくつろいでいるのか？コイツ！

「ほっほっほ…では、また！」

男はスタスタと去って行った。

まっ…いっか♪さて御馳走ちゃん！

私は特に気にせず皆の後を慌て追った。

一回逝つとく? 2 (前書き)

前回半端に終わった続きです

一回逝つとく？2

「…うわぁっ」

「凄い！」

執事に通された部屋には既に料理が用意されていた。

テーブルの上には、これでもか！と料理の山がところ狭しと並んでいる。

…しかも！料理は和、洋、中、ゲテモノ？と各ブロックに別れていてまるで、競い合っているかの様だ。

「お初に御目にかかるのお、私がこの屋敷の主で貿易商をやっているカシムと申す」

「う…うつ、じゅる♪飯！」

私達は餌を目の前におあずけを食らった犬の如く料理に目を奪われている。

ぐるぐるー！

「まあ…話しは食事をしながらと言つことで、どうぞ召し上がって下さい！」

その言葉を待っていた私達は一斉に料理に飛びかかった。

「あーっ！それ私の海老ちゃん！」

「それ僕が食べてたんだよ」

「ふっふっふ…貴様！どうやら死にたいらしいな！」

「くっ…逃げちゃダメだ！」

「もう、あなた方…食事くらい静かにしなさいよ！」

リリスが呆れた顔で此方を見ているが、彼女の前には既に空のお皿が数枚重なっている。

「まあ…まだまだ料理は有りますから…多分」

カシムさんは私達の食べっぷりに圧倒されている。

「くうー美味い！」

「本当！最高」

私達の前には皿の山♪どーんとコイ！おかわりカモン♪

「ふっ…お腹一杯」

「ホントよく食べたね」

「あなた達は食べ過ぎよ！」

リリスの冷たい視線。

…ふっ、そういうアンタもお腹ちよつと出てるよ、あえて言わないけど。

…さてお腹も膨れたし

「それで依頼なんですが」

私がカシムさんに話しかけると待ってたかのようにカシムは口を開いた…って実際待ってたんだよね。

「実は、取り返して欲しい物があるんですよ」

カシムの依頼内容は…先日この屋敷であるものが盗まれたらしい。なんでも先祖代々から伝わる品で黄昏の宝玉という物で盗んだ犯人達は既に特定しているが強者揃いで手を焼いているとの事。

「…わかったわ」

「引き受けてくれるんですね！」

「もちろん」

「では、詳しい話しは執事に聞いて下さい…報酬は品物と引き換えと言つことで私は用事があるのでこれで」

カシムはそれだけ言うと急いで部屋から出ていった。

金持ちって忙しいんだねえ…まあ貰える物を貰えば、こっちは関係無いけどね♪

「よし…デザート食べたら行くよ♪」

「まだ…食べるの？」

「凄いですわね、レニーさん！」

二人の視線を無視してデザートに手をつけ始めた私♪

…だって残したら勿体無いじゃん♪

「コックさん！じゃんじゃんもって来て♪」

「ちーす！」

ずらっと並んだコック団が料理に取り掛かった。

そして私とデザート達の壮絶な戦いが今、幕を開けた…。

…そして閉じた。

「ふう…すっかり暗くなっちゃったね♪」

「誰のせい？」

「うっ」

私は、結局アレからずっと食べ続けて最後はコックが…

「食料が尽きたんでもう許して下さい！」

って泣いて頼んだので仕方無くやめた。

最後にあの悶絶プリンのおかわりが欲しかったな」

「ねえ…レニー、執事さんの言ってた場所ってアレじゃない？」

マカロの指差した方には一軒のボロ屋がある。

平垣には草が密集していて窓ガラスは所々割れている。

どうみても人が住んでい無い感じなのに家には明かりがついている。

「どうするのレニー？」

「うーん強行突破」

「…やっぱ」

「その必要は無いみたいですよ！」

「…お前達あの男の差し金か？」

リリスの言葉を待っていたかのように私達の周りを何者か取り囲んだ。

皆、頭から全身黒い布状の物をスッポリ被りっついて表情が判らないが、殺気がひしひしと伝わってくる。
その数7、8人。

黒装束軍団は警戒しながら少しずつ私達との距離を縮めて来る。

「どうするのレニー？」

「立ち塞がる者は全てぶっ飛ばすのみ」

「でも数が多すぎますわ！」

「そつだよ！」

私達が話している間にも黒装束達はジリジリと近付いてくる。

「ねえ…何とか逃げようよ！」

…ジリジリ（黒装束達が近付いてくる音）

「完全に囲まれてるわ！」

…ジリジリ

マカ口頭を抱えながら…

「ああー、レニーと一緒にいるとトラブルばかりだよ！」

…ジリジリ

「しょうがないでしょ！」

…ジリジリ

「二人共言い争っている場合では無いわ！」

…ジリジリ

「ジリジリうつさい！」

近付いて来た黒装束Aに足元の石を拾って投げつけた。

「うつ！」

不意をつかれた黒装束の男は避ける間も無く額に石をぶつけて違う世界に旅立っていった。

仲間が殺られた事によって黒装束達が一斉に動き出した。

「マカロ援護！リリは…何か適当にやって！」

「わかった待ってて」

マカロは術の詠唱にはいった。

「…ちょっと待ってよ！何で私は適当なの？」

リリスが膨れっ面が此方を見ているがとりあえず無視。

黒装束達は私に狙いをつけて一斉に斬りかかって来た。

「待つて！いつぺんに無理！」

斬りかかって来る数本の刀を必死で避けながら切実に訴えるが、向こうは聞いてくれない。

…マカロはまだなの？コイツら何気に強い！一人ずつなら何とかするけど…

その時、一人の黒装束が私の足を薙ぎ払った

「…しまった！」

バランスを崩して倒れ込む私。

そこになだれ込む黒装束達20名。

…増えてるし！

刀が目の前に降り下ろされる瞬間、もう駄目だと目を閉じたその時、

「ほっほっほ！お嬢ちゃん、諦めたらそこで終わりだよ！」

…その声は！

レニー、絶体絶命のピンチ（…たぶん）その前に現れた人物とは敵か味方か？はたまた悶絶プリンか？

…次週に続く

一回逝つとく? 3

あつ…!

声の主は髭を撫でながらゆつくりと歩いてきた。カシムの屋敷で見た庭師のオツチャン!…何でこんな所に?

「お嬢ちゃん、誰にでも立ち向かう度胸はいいが、ちと己の力量も考えんとの♪」

庭師のオツチャンは此方を見ながらウィンク一つ。

「後は儂に任せとけ!」

足を曲げたり伸ばしたり軽く準備運動をしながら私の前に出るオツチャン…大丈夫?

真打ちの登場で黒装束の男達にも多少なりとも動揺が生じた様子だ。

「主もアレを狙っているのか?…ならば!」

最後まで言葉を発する事無くリーダーらしき男の手の合図と共に、黒装束達が二手に別れて動き出した。

先程の戦闘でこちらの実力を侮っているのか?こちら側に迫って来る黒装束の数が少ない。

これなら何とかなるかな?

私の方に迫り来る攻撃を避けながらオツチャンの方を見ると…。

オツチャンの方も既に戦闘中。

一人目の黒装束の降り下ろした刀を半身を引いて避け、腹に一撃！

「まず！一人」

おっ♪言うだけあつて結構強いぞ！

続いてオツチャンを挟み込む様に対峙する黒装束。同時に斬りかかって行く。迫りくる刀を紙一重でかわしながら背後に周り首筋に手刀。

「三人じゃ！」

「…死ね！」

下から斜めに切り上げる様に振り上げられた刀の上に…

おお…スゲー乗ってるよ♪

オツチャンを乗せたまま放せばいいのに武器を必死で掴んでいる黒装束の頭の上から、踵落とし♪

「ほっほっほ！四人」

…オツチャンすげえーな！

私が腕を組んで感心して観てると…。

「余裕だな？小娘よそ見…ぐはっ」

何か話しながら突っ込んで来た約一名を私は前に突き出した拳で一撃粉碎。

…甘いぞ黒いの！

倒れた黒装束を更に追い討ち、顔をがしがし踏みながら一言！

「生まれた事を後悔しろ」

そして私がしばいている黒装束が生まれた事を後悔している頃オツチャンはというと…。

現在も数人と戦闘中、三方向から迫って来る複数の黒装束にオツチャンが何かを投げつける。

「うつ…！」

胸元を押さえて次々と倒れる黒装束達。
…よく見ると、

家庭園芸用に使うハサミが刺さってる。

「ほい、十人目じゃ！」

強いぞ…このオツチャン！

「ほれ、どうした？」

オツチャンは黒装束達に向かって手招きしている。あまりのオツチャンの強さに残った黒装束達は警戒しているのか遠巻きに囲んでいる。

「来ないなら此方から行くぞい！」

叫びながらオツチャンが黒装束達の群れに突撃！と同時に…

「レニー！伏せて！」

背後からのマカロの声に慌てしゃがみ込む私。

「真夏の鍋焼き！」

声と同時に魔力の炎が地面を這うように前方の黒装束達とその他一名をアツサリと呑み込む。

あつ…オツチャン…まっいいっか♪

私は荒れ狂う炎の渦を眺めながら呟いた。

「オツチャン！あんたの事は忘れないよ…多分」

手で十字を切る私♪

それはそつと、お宝、お宝♪

あれ？そう言えばリリスがない！

「レニー、こじよ！」

私が振り返るとボロ屋の方からリリスが現れた。

「探してたのってコレかしら？」

リリスは手に持っている物を私達に見せた。それは鶏の卵位の大きさの、やや黄色がかった物だ。

不思議な事にその卵は薄明かるく光っている。

「小屋の中に置いてあったわ！」

ちよつと自慢気なリリス。

「それなら用済ね」とつと、ずらるか！」

悪人っぽいセリフを吐きながらそそくさと来た道を引き返した。

後にはまだ魔力の炎がいつまでも燃え続けていた。

…所でほつといていいのかな？アレ！

一回逝つとく？4

屋敷への帰り道…

「…でコレって、何だろうね♪」

私とマカロの間を行ったり来たりしている卵型の小さな物。

「ほらっ！マカロ、ちゃんとキャッチしないと落とすよ♪」

「ちょっと…レニー、ちゃんと投げてよね！」

手元が狂い乾いた音をたて地面に落ちる卵？慌て拾いに行くマカロ。

「ほっほっほっ…あんまり粗末に扱わんでくれないかのう」

…この声は！

声のした方から一人の男が現れた。

やっばし！生きてたんだオッサン。

しかも傷一つ無い！

「流石にあそこで魔法はちと焦ったかのう」

驚くマカロとリリス。私は何と無く無事な気はしていたが…まさか無傷とは…。

「物は相談じゃが」

「嫌よ！」

「…へ？」

即答する私。驚くオツチャン。

「…まだ何も言っとらんが…」

「どうせ、コレをよこせていうんでしょ！」

「…まあ、そうなんじゃが」

やや控え目に言うオツチャン。

「…でいくら出す？」

私は右手で丸の形を作る。

「お嬢ちゃん…若い内は苦勞をせんとおう」

「…でいくら出す？」

「…うっ」

オツチャン額に汗タラタラ♪

「…でいくら出す？」

「それは…元々はとある場所から盗まれた物なのじゃ、儂はそれを取り返しに…」

「へえー…でいくら出す♪」

根負けしたオツチャンは

「…儂が出す」

ふふふ世の中、慈善事業なんて無いのよ♪

その前に…まず依頼人の所に行かないとね、そんな盗品の依頼なんてしてくれちゃてお礼しなきゃ♪

「当然、一緒に来てくれるよね？」

「儂の方も、あそこに用があるからいいじゃろ」

私達は足並みを揃えてカシムの屋敷へと向かった。

ウフフフフ…カシムちゃん待っててね♪

私の悪魔の微笑みに隣にいるマカロが怯えていた。

カシム屋敷にて…

「待ってましたよ」

カシムは私を見てこちらに手を差し出した。

「…で例の物は？」

「何が？」

「…いや、だから…」

「コレかしら？」

「それだ！さすがですな」

私の手に持っている卵を見てカシムはニヤリと笑う。

「…で何に使うの？」

「それはお前達には関係の無い事だ！」

私の間にカシムは少し機嫌悪そうに答えた。

「へえー…じゃあ渡せないね」

「契約を破棄するのだな！」

カシムが私をジロリと睨む。

「そう捉えても構わないわ」

私も睨み返す。

「…後悔するなよ！」

カシムの言葉と同時にいきなり執事が現れた。

「お呼びでしょうか？」

「お客のお相手をしてやれ！」

「かしこまりました」

執事が此方をチラリと見る。

ゾクッ、コイツ出来る…執事から物凄い殺気を感じる。

うつ…勝て無いかも。人に頼むくらいだからザコ集団だと思いきや
なんの！強敵がいた。

私は腰の剣に手をかける…。

「お嬢ちゃんでは奴には勝てんよ」

オッチャンが一步前へ出る。

「！」

「久し振りじゃのう…」

「…そうか生きていたのか！」

執事は残忍な笑みを浮かべた。

「ああ…まだアイツの所に逝くには早いみたいじゃのう」

オツチャンは遠くを見つめ答える。

「直ぐに送り届けてやるよ！」

「ふっ…その前にお主に引導を渡さぬとな！」

二人は同時に動き出した。

…何があつた二人の間に！

周りの事はお構い無しに二人は戦いを始めた。

「喰らえ！奥義、竜王翔破斬」

「何の！秘技、天地激裂断」

…よう分からんが、叫びながらお互いに技を繰り出している。

「やるな！裏奥技、虎空炎舞殺」

「昔を思い出すわい！絶秘技、撲殺脳激症」

技と技とのぶつかり合い、飛び散る汗、吹っ飛ぶカシム。達人同士の戦いとは、とにもかくにも激しいものか？

私達の目の前では常人では計り知れないような戦いが繰り広げられている…ってそれどころじゃない！

私達は慌てて屋敷から逃げ出した。

お馬鹿さん二人の手加減の知らない攻撃の余波で屋敷のアチコチが吹き飛ぶ。既にカシムは二、三どバウンドして動かなくなっている。屋敷から私達が外に飛び出すと同時に屋敷は物凄い音をたてながら崩れた。

崩れた屋敷からは何も動く気配無い。

「…終わったの？」

マカロが恐る恐る私に尋ねてくる。

「終わった見たいね」

リリスもやれやれといった表情でこちらを見る。

「…行こっか？」

私の言葉に二人は無言でついて来る。

夕日はいつの間にか沈み辺りは肌寒くなってきた。私達は宿に向かって歩き出した。

…お馬鹿さん達よ安らかに眠れ♪

私は崩れた屋敷を振り返りまた歩き出した。

第9話・振り向けば最終回（前書き）

「あれだけ頑張って結局コレだけか…」

私の手の中には卵型の物体が一つ。一体何なんだろうかなコレ？

まあ…何処かの店に売っ払って食事になりつかねば！

…アレから何も食べてない！お腹を押さえながら歩き出した。

第9話・振り向けば最終回

ようこそ！勇者様御一行！

街の入り口にはそんな垂れ幕が掲げられている。

「…何この街？」

私達は目の前に群がる人の群れ、建ち並ぶ出店の光景に暫し啞然とした。

街のいたる所に垂れ幕や看板だらけ、その内容が、魔王出没弾丸ツアーとか魔王討伐観戦崩式ツアー、はたまた流れ弾的野次馬ワイド何てのものもある。

「いらっしやい！当店名物の魔王饅頭はいかが？」

呼び込みの少年が客に向かって叫んでいる。

「…ちよつと！」

「！」

とりあえず少年を近くの暗い所に引っ張り込んだ。

「…何なのこの街？」

いきなり掴まれて多少怯えていた少年だが、持ち前の営業スマイルで、

「勇者様ですか？お待ちしておりました！」

「痛っ！」

とりあえずこちらの質問に沿った返答が返って来なかったんで一発殴った。（腹が空いてる私は獰猛です）

「もう一回、だけお姉さん質問するね、この街は何をしてるのかな？」私の手に握っている鉄アレイを見て、血がダラダラ出ている鼻を押さえながら少年は答えた。

「は…はひ、この街の近辺で魔王が出没したらしいので街を挙げての大々的な催しにしようと…で今のうちにガッツリ稼いで…もとい！勇者様のお役に立てる様に支援しています」

私のプレッシャーに本音をチラツと吐きながら少年は答えた。

いるんだよね、何かにつけて金にする輩達が！…って？

「もしかして魔王が出たってこの辺りなの！」

「はい、そうですが…あの、もう行ってもよろしいですか？」私が手を放すと少年は慌てて逃げ出した。

「どついう事かしら、レニー？」

リリスが困惑した表情で私を見る。

「たぶん噂が広まるにつれて情報があやふやになったのかもね！」

「…作者の都合じゃない？」

マカロが鋭いツツコミを入れる。

その瞬間！マカロの頭上に狸の置物が落ちる。

そしてマカロも暗い世界に墜ちる。

触れてはいけない部分だったみたいね、気を付けよ♪

動かなくなったマカロを眺めながら私達は思った、気を付けよ♪

動かなくなったマカロを眺めながら私達は思った。

まあ…どおりで強面の方達が沢山いる訳だ。

街の人、観光客に混じって傭兵姿の男や、引きこもりのニート、RPGのパーティーみたいな等の、まるで仮装パーティーの様だ。

「このままだと誰かが先に魔王倒しちゃうんじゃない？」

いつの間にか復活したマカロが私達に向かって話す。

「…ちよい待てええーい！それは不味い！」

それでは私の計画が…幻のお宝鉄アレイちゃんが…！

「よし！こうなったら今日にでも魔王退治よ！」

「えーっ！っ！」

マカロとリリスの声がハモった。

振り向けば最終回2

辺りは墨を溶かしたように真っ暗だ。街から離れたとある山中。ここから街の明かりがチラチラ見える。流石に山の中、この辺りまでは明かりが引かれていない。

数人の足音。松明の灯りに照らされた一行が見える。

無論私達だ。

「この先ですよ!」

少年が指差した方を見ると大人が一人何とか入れる位の洞穴がある。

「あのく明日も仕事があるんで、そろそろ帰っていいですか?」

「ん? ああ... ありがとね」

少年は来た道に戻って行った。

「さあ... 行こっか」

「ねえ... レニー! 本当に行くの?」

「当たり前でしょ!... ほらっ!」

私に押されてマカロは渋々と、穴の中に入って行く、それに続いてリリースもついてくる。

「ふん…中はヒンヤリしてるね」

穴の中は陽が射さない為、湿った空気が漂っている。

「…ちょっと寒すぎない？」

後ろからマカロが白い息を吐きながらついてくる。

「まあ…ちょい寒いかな、リリはどう？…ってアレ？」

私がマカロの肩越しにリリスを見ると…コイツ！

「どうしたのレニー？」

当のリリスはていうと…ちゃっかり毛皮のコートを着込んでいる。

「いや…何でも無い」

「それはそうと貴方達寒く無いの？」

リリスが不思議そうな顔でこちらを見ている。

「だ…大丈夫よ、ねえマカロ」

「あ…あ、あ、うん」

「それなら良いけど」

私とマカロの恨めしそうな顔はリリスからは見えなかった。

…私はメモ帳を取り出し書き込む。マカロが後ろから除き込む、暫く後マカロの顔は恐怖で歪みガタガタ震えている。

えっマカロが覗いた物は何かって？そのメモ帳には、『抹殺ブラックリスト』と書いてある。メモ帳には、リリスの名前が書いてあり、その名前の下には、九ポイント抹殺まで後一つと走り書きがしてある。

…もうすぐよ、ウフフフ！私の嬉しそうな微笑みにマカロだけは震えていた。

「…まあ、それはさておき…こんな所にホントにいるのかな？」

周りはゴツゴツした岩壁、私達以外に生き物の気配はない。

「基本、悪役つてのはジメジメ、暗闇、ネガティブつてのが基本三原則ですからね」

とリリス。

…基本三原則って？

私とマカロの頭には特大クエスチョン！あえて面倒なんでツッコミは無し！

「レニー見て！」

マカロが前方を指差す…指差すその先は魔力の灯りで照らされている。

「ん？…行き止まりみたいね！」

灯りで照らされているそこには何もなかった。

「ちっ…街の人間のガセ情報かつ！」

まあこんな場所に魔王なんかいても戦いづらいし…。

「レニー、そこになにか有るわよ！」

言われて落ちている紙切れを拾う私。

「…ふむふむ」

『勇者のみなさんへ…』

拝啓 初夏の訪れと共に暑い日々が続いている今日この頃、いかがお過ごしでしょうか？

私、魔王は以前より皆様方のお越しを心待ちしておりましたが、一身上の都合により一度実家の方に帰らねばなくなりました。

つきましては…折角お越し頂いて大変恐縮なのですが、今回の予定はキャンセルという事でお願いします。次回の訪問予定は百年後となっております。最後に、本日は忙しい中、私の為に時間を割いて頂きありがとうございます。

敬具

『

「…律儀な魔王だね」

「…そうですね」

「……」

私達は顔を見合わせた。

「…とりあえず帰る？」

「…そうね」

私達は来た道を戻り始めた。帰りの道で話しかける者は誰もいなかった。

翌日…

「リリはその後、どうするの？」

ショキングな出来事が起きて一夜明けたその日の昼下がりに。

外がにわかに騒がしい…多分、例の『魔王』の話題でもちきりなんだろう。

「そうね…一度お父様の所に戻るわ！貴方達は？」

リリスは自分の荷物を整理しながらコチラを見る。

「うーん、考えて無い！」

私とマカロは顔を見合わせながら答える。

「…えっ！」

「元々、目的何てたいして無かったし…適当にブラブラ旅するわ」

「…そっか、じゃあもうすぐお別れね！」

リリスが少し寂しげに答える。

「また何処かで逢えるわよ」

私がリリスの肩に手を置く。

「…そうね」

「リリ、元気でね」

「うん！レニーもマカロも元気で…」

宿を出て私達は自分達の進むべき道に別れた。

…あんなのでもいなくなると寂しいな。

ふとりリスの後ろ姿を見て思う…。

…よし！

「さて！マカロ、コレからどこ行く？」

「レニーに任せるよ」

マカロはコチラを見ずに答える。

はぁーん、さては…。

「マカロ泣いてるの？」

「泣いてないよ！」

慌てて袖で目頭を拭うマカロ。

「泣いてんじゃない！」

「泣いてないったら！」

必死で否定するマカロを横目で笑いながら私は、

「まあ…いいわ！そういう事にしときましょ♪行こっか」

「うん！」

私達は歩き出した。これで私達の旅が終わった訳では無い…まだ始まったばかり。

これから先何が待ってるのか分からないけど…暫くはコイツと一緒にかな？

必要以上に元気に振る舞うマカロを観ながらふと考える。

旅は道連れ…そんなフレーズが頭をよぎる。コイツと一緒になら悪くないかもね♪

振り向けば最終回2（後書き）

『勇者はじめました』最後までお読み頂きありがとうございました
♪ 作者のくろぱんだです！

この作品は一応作者の初作となります（同時進行の作品有り）

小説を書くにあたっていろんな問題点がありました。物語の構成の層の薄さ、適切な表現…まっ例えを挙げると切りが無いですけど♪
ただ小説の更新期間が長かったりして御迷惑をおかけしました。

至らない作品だとは重々承知ですが自分にとっては想い出の作品になりました。作品の内容がまとまれば続編なんてのも考えています♪

…最後に、ここまでお付き合い下さいまして誠にありがとうございました
♪

くろぱんだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3370b/>

勇者ははじめました

2010年10月10日20時26分発行